

曾谷入道殿御返事

文永一二年三月

五四歳

方便品の長行書き進らせ候。先に進せ候ひし自我偈に相副へて読みたまふべし。此の經の文字は皆悉く生身妙覺の御仏なり。然れども我等は肉眼なれば文字と見るなり。例せば餓鬼は恒河を火と見る、人は水と見る、天人は甘露と見る。水は一なれど果報に随って別々なり。此の經の文字は盲眼の者は之を見ず、肉眼の者は文字と見る、二乗は虚空と見る、菩薩は無量の法門と見る、仏は一々の文字を金色の釈尊と御覽有るべきなり。即持仏身とは是なり。されども僻見の行者は加様に目出度く渡らせ給ふを破し奉るなり。唯相構へ相構へて異念無く一心に靈山淨土を期せらるべし。心の師とはなるとも心を師とせざれとは六波羅蜜經の文ぞかし。委細は見參の時を期し候。恐々謹言。

文永十二年三月 日

日 蓮 花 押

曾 谷 入 道 殿